

分子科学研究所 一般公開2012



去る2012年10月20日（土）に、分子科学研究所の一般公開が開催された。今回は「行こう！分子探しの旅へ」をメインテーマに掲げ、国民的人気を誇る某マンガにあやかって、若き海賊たちが「分子」という宝ものを探しに勇躍大海へ乗り出す姿をポスターとした（ちなみに、このポスターは一般の方々にも広く認知されたようだが、「分子研」のものとは思わなかったとの声もちらほらあったようである。少し、ギャップが大きすぎたと反省している）。

当日は、初秋の穏やかな日差しのもと、ポスターのキャラクターを配した大きな「タテカン」が来場者の皆さんをお迎えた。



今回の一般公開では、所内をあらゆるこちら歩き回らずとも済むように、会場を「計算機センター1階」「実験棟」「UVSOR」「岡崎コンファレンスセンター」の4ヶ所に集約した。特に、実験棟4階の計10スパンのスペース（研究グループの入れ替え等により現在たまたま空いていたもの）ならびにコンファレンスセンターの中会議室とホワイエに、

総計29の展示を集中して配置した。そのうちの半数近くが見学者の方々が実験したり物を作ったりパソコンを操作したりできる体験型のものであり、多数の市民の方々が熱心に参加されていた。また、スパコン、UVSOR、極短パルスレーザー、NMR等の研究施設の見学も、大変に人気があった。さらに、市民公開講座分子科学フォーラム特別版と銘打って、所内3名の研究者が各自の研究を分かり易く解説する講演を行った。こちらには、分子科学フォーラムのリピーターの方々がお越しになり、熱心に聴講されていたようである。

一般公開とのコラボレーション企画として、「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」ならびに「女性科学者とおしゃべりしよう！資生堂サイエンスカフェ in 分子研」も同時開催した。前者では、事前に申し込み頂いた中学生ならびに高校生の皆さんに液体窒素を使った実験などを体験して頂いた。後者では、資生堂女性研究者サイエンスグラントを受賞した分子研の2名の若手研究者が、研究の道へ進んだきっかけなどについてガールズトークを繰り広げ、女子高校生を中心とした参加者の方々に大好評であった。

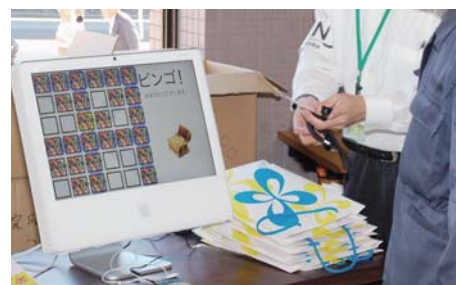
今回の一般公開での新しい取り組みとして、磁気カードを用いたタッチラリーを実施した。各展示に設けられたポイントでカードをかざすとチャイムの音とともにパソコンの画面上にピンゴが表示されるように設定されており、

多数の展示を回って1列そろえると「ピンゴ！」として景品の「一家に一枚周期表」を差し上げた。これも、特に小さなお子さんに大人気で、走り回るようにポイント間を行き来するチビツ子の姿が多数見かけられた。

今回の総来場者数であるが、1100名強と前回までよりもかなり少な目であった。その理由を現時点では明確にできていないが、市民の皆様方への周知の方法について再検討が必要であろうと考えており、次回への課題である。ただし、その分、各展示は適度な込み具合であり、時間をかけて1つ1つゆっくりとご覧になっている方が多かったように見受けられたのは、ケガの光明とでもいうべきか。

総括すれば、ご来場頂いた多くの方々に「サイエンス」を楽しんでお帰り頂いたものと確信している。これもひとえに、事前の準備および当日の運営に対する、所内ならびに事務センターの皆さんの多大のご尽力のお蔭である。ここに厚く御礼申し上げる。皆さんのおもてなしの心は、確かに市民の方々へ伝わりました。

（大島 康裕 記）



アンケートから見る一般公開

一般公開その他の広報活動の質的向上のため、一般公開来場者にアンケート調査を実施した。アンケートの回答率は入場者1126人に対して566件（回収率50.3%）であった。アンケート回答者の居住地の分布（図1）から来場者の中心は岡崎市民であった。研究所の活動が近隣住民に認知されていることがうかがえる。男女比（図2）はほぼ均等であった。年齢分布（図3）は、20代の割合が低い傾向にあり、この傾向は3年前の調査でも同様であった。また、大学・大学院・短大・高専の学生の割合も少ない（図4）。一般公開は大学生・院生向けのオープンキャンパスとは趣旨が異なるが、この年齢層の来場者数の向上は今後の課題である。来場者のグループ構成（図5）の45.1%は親子であった。来場の動機（図6）に於いても「子供に科学を親しむ体験をさせたい」という回答は比較的多かった。また、来場の動機として最も多かった回答は「科学全般への興味」であり、「分子科学研究所に興味」と答えた人も比較的多かったことから、多くの人々が科学への高い意識を持って一般公開を見学したことが分かる。さらに一般的な意識調査として、「日本の『科学技術の水準』」に関する評価を尋ねたが日本国民一般の意識（『日本人の国民性調査2008』（統計数理研究所））と差がなかった（表1）。一方で、「科学が日常生活に役立っている」と答えた来場者は68.6%であり、日本国民の平均値39.1%と比較して高く（表2）、今回の所内の展示によって所内の成果・研究活動が好意的に受け入れられたと言える。展示の人気投票のベスト10は、「DNAを取り出してみよう」「最先端のスパコンを見てみよう」「UVSORの施設見学」「金属のやじろべえを作ろう」「（おわん分子で）サッカーボールを……」「空気がないとどうなる？真空で遊…」「光のスピードを測る」「雨露をつたう光」「光を分解してみよう！分光器作り」「蛋白質のかたちづくり」であった。ベスト10のうち、9個は体験型あるいは参加型の展示であった。「雨露をつたう光」は、体験型や参加型でないにもかかわらずベスト10入りし、かつ初来場者に好まれる傾向があった。この展示では「展示とポスターの内容を平易なものに留めたお陰で、わかり易くて安心するという意見を頂いた」（担当野村助教）ということである。各来場者に配布された磁気カードを用いたタッチラリーは、オンライン管理され、来場者の行動追跡にも用いられた。アンケートとの相関も取られ、次回の一般公開に役立てられる。アンケートの調査内容の設計およびデータ解析には、情報・システム研究機構統計数理研究所の加藤直子さんの学術な協力を頂いた。

（柳井 毅 記）

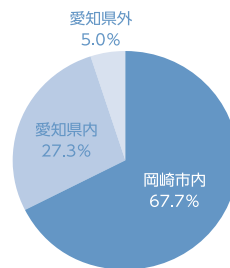


図1 居住地

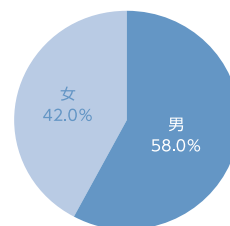


図2 男女比

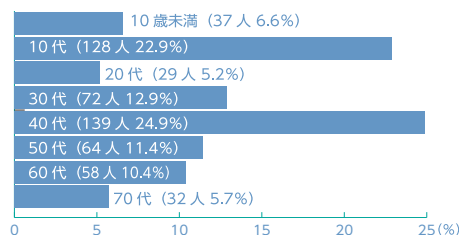


図3 年齢分布

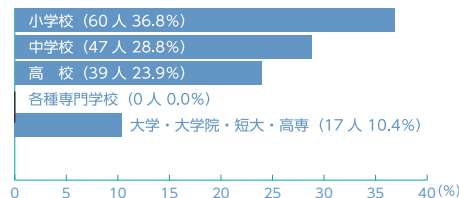


図4 学生の在学数

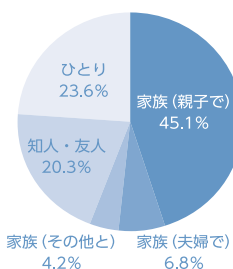


図5 来場者のグループ構成

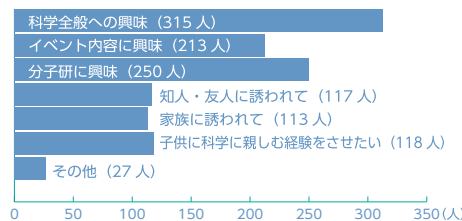


図6 来場の動機

表1 日本の「科学技術の水準」は？

	非常によい	ややよい	ややわるい	非常にわるい	わからない
分子研来場者	36.6	47.6	9.3	0.3	6.5
日本国民	35.5	51.0	6.4	0.7	6.4

表2 科学は日常生活に役立つか？

	役立っている	少しは役立っている	役立っていない	わからない
分子研来場者	68.6	25.1	1.4	4.8
日本国民	39.1	47.4	8.3	5.2